２０１７年１０月１日
第２８１号

藤沢 エコネット

藤沢環境運動市民連絡会議
（略称）藤沢エコネット

主な記事
- 「星と波と風と」～帆船で巡った太平洋16,000km
- 武田薬品研究所の近況
- 筑邦炭坑の強制労働とリンチ・放射能測定値
- ジェット気流発見にまつわる話

http://econet2015.sakura.ne.jp
事務局　e-mail: aoyagipc@jcom.home.ne.jp 青柳
☎／ＦＡＸ　0466－87－4922

「食の安全」雑感

とうとう幼い女児の死亡が出てしまったO－157の食中毒、以前多くの感染者を出したO－157事件の時は“カイワレ大根”が感染源と言われましたが、今回は感染ルート解明が困難とのことで心配が募ります。まして中毒の何年後でもこの腸管出血性大腸菌で亡くなることもあるそうですから気になります。

販売されている食品は過剰に殺菌剤での消毒がなされていることでしょう。

長女が誕生した1970年は“光化学スモッグ”という言葉を初めて耳にした年で、この頃から大気汚染『複合汚染』で知った農薬汚染、食品添加物等の問題が一気に噴き出した気がします。　子育て中であり安全な食を求め生協や食生活研究会に関わって勉強しました。先駆者の方々の運動の成果で解決されたものもありましたが、今の、ネオニコチノイド系農薬、チェルノブイリ・福島原発事故による地球規模の放射能汚染には頭の痛いことです。

加えて偽装食品のこともあり食品の選択に苦慮している中で、最近考えもしなかったことを突き付けられたのが小麦粉、油脂の問題です。

小麦はアレルギーを起こすほか、様々な現代病の原因になることが分かってきて、その背景には高収量のために行き過ぎた品種改良があるという、リーキーガット症候群（腸管壁浸漏症候群、腸内の慢性炎症から腸壁に穴が開き、通常腸壁を通過してはいけない様々な物質が腸壁の穴から入り込み、アレルギーなど引き起こす現代人に多く見られる疾病のひとつ）をひきおこす小麦は食べるな、とまで言われるが、麺類好きな我が家では困惑してしまいます。

今まで私は人間より体温の高い動物性の油脂は使わず、常温で液体の「エゴマ油・ゴマ油」を使用していました。揚げ物、炒め物には動物性のバター、ラードが良いと指摘する人がいることに驚きました。

その上、昨今は糖質制限、ケント食など様々な食べ方の指針も出て何をどうして良いのか混乱するばかりです。

この食環境の中で考えた私の対策は『小食』の実践あるのみと思っておりますが、食べることの好きな私にとっては大問題で失敗ばかり繰り返しています。（小林深雪）

クイナ　日大ビオトープで　宮地氏提供

「星と波と風と」
～帆船で巡った太平洋16，000キロの旅

太平洋の島々に住む人たちは、古代東アジアから進出してきた私達と同じモンゴロイド。しかも、海流や貿易風に逆らっての航海でした。

同じように、東に輝く星を目当てに進み、いつか自分もその経験をしてみたい。極めて個人的な理由でのこのプロジェクトである日本からヨットでのミクロネシア巡航の旅。母港横須賀を出て最初の寄港地父島から出国､そこからは１７日間無寄港で太平洋を進み、まっすぐマーシャル諸島を目指しました。

＜洋上で目にしたこと＞　途中、ヨットから見える景色は、ただひたすら広い海、水平線と青い空、そして様々な形の雲、夜には降り注ぐような満天の星、もちろん雨の日も曇りの日もありますが、赤道近く北緯７度まで南下するので、暑さとの戦いもあります。（７０日間の航海で５キロ体重が減りました。）しかし、一度も他船と遭遇することなどない広い太平洋を航海中、最も多く目にしたのは大量のゴミや漂流漁具、そして海水温が一度も３０℃を下回ることが無いという無気味な現実でした。ちなみに、私が約３０年仕事で関わってきたグアム島では、昨年から今年にかけて海水温が３０度を切らなかったという報告を事前に受けていました。こんなことは聞いたことがありませんでしたが、実際に航海していて、その現実が、地球の生命活動にただならぬ脅威を与えているほどの規模であるという事を実感しました。

＜マーシャルで実感した現実＞日本を出て２６日目に到着したマーシャルでは、これまでのヒバクシャ達との交流、マーシャルとの関わりの中で「気候変動」と言う現実が重みを増してきました。

「沈みゆく島」､「沈みゆく国」などと報道される太平洋の島々、今回自分の操船する船で島々を巡り、海抜わずか数メートル程しかないマーシャル諸島の島々は、海岸浸食に脅かされ、旱魃や日照り、そして明らかに気温が高くなっているという厳しい現実にさらされていました。そして、「昔はこんなではなかった・・・。」という島の老人が最後に言った「この島に希望はない！」と言う言葉は、生活を脅かすほどの厳しさを増す気象現象だけではなく「大国による暴虐の歴史」にさらされてきた彼らの叫びの様な気がするのです。

植民地支配、太平洋戦争、原水爆実験による核の被害と他国に押し付けられてきた負債。更には、大国の経済活動による排出ガスや、海洋汚染などで、この太平洋の小さな島国は、今まさに私たちの「より快適な暮らし」を求める欲望の犠牲者にもなりつつあるのです。島の老人の言葉は､「大国のエゴ」に振り回されてきたこの国の歴史を物語っている様な気がしてなりませんでした。

＜世界が見える＞マーシャルを訪れるたびに思うことは、この小さな国に居ると､「世界が見える」ということです。経済先進国と言われる国々が引き起こしていることが見えてくるのです。

そして、それらが「度を越している」がために地球環境にも脅威を与え、気候変動を引き起こし始めていると言わざるを得ないと感じるのです。これらが彼らの命と生活に重くのしかかり、島の人たちが発する言葉一つ一つが警告でもあると思うのです。正に太平洋の島々に暮らす人たちは「太平洋のカナリア」です。

強風できしむ船具の音で眠れぬ夜を過ごした環礁内での錨泊地。今航海で自分自身も経験したマーシャルの海｡「未来はない」と言う言葉に込められた彼らの“こころ”を少しでも知ることが出来たような気がするのです。

厳しい現実を知らされたマーシャルでの旅でしたが、それでもきっと希望はあると信じたい！「知ることは希望」であるはずだから。

武本匡弘
ヨット　Ｖｅｌｖｅｔ　Ｍｏｏｎ号船長
日本サンゴ礁学会会員
ビキニふくしまプロジェクト会員

筑豊炭鉱の強制労働とリンチ

1939年（私が生まれる直前）朝鮮人を騙すようにして日本の炭鉱に強制的に連行し始めた。ノルマ達成ができなければ地上には出してもらえなかった。朝鮮の国元へは最初の１か月分しか送金せず、日本で支給する残りの半分の給料も、逃亡防止のため、手渡さず、そこでしか使えない、その鉱山用の代用の切符（甲票）だった。朝鮮に送金を確認したり、働いた分を換金したいと申し入れた抗夫もリンチが待っていた。気を失ってもくり返し水をかけられ、桜材の木刀で、労務担当者に打ちのめされた。落盤事故で毎日のように死者や抗夫として働けない負傷者が出る。リンチで死ぬことも多い。まだ息のある者も事故死として穴に生き埋めされた。戸籍もない朝鮮人は火葬にも燃料の石炭がもったいないと言うわけだ。待遇が最も悪い麻生炭鉱鉱業所では人権無視で何人もの朝鮮人が死んだが、その記録すらない。最近“ナチに学べ”とわめいた安倍晋三総理とお友達の副総理麻生太郎、その人の実家の会社だ。「太郎に会社を継がせると倒産するから、政治でもやらせとけ！」は、ある意味では正しい判断だったかも知れない。

私は３歳から８歳（小学２年生）まで筑豊炭鉱の上のセメント工場の社宅にいた。遊び仲間は、もっぱら朝鮮人抗夫の子どもたちだった。ケンカが強く気風が良いので、親しくなったのだ。落盤事故やリンチで死んだ親を持つ仲間は消えていった。

全国で６０万人が炭鉱関連で就労していたと言われている。なかでも、炭鉱のコメ騒動で憲兵に銃殺された朝鮮人を父に持った大好きだった仲間との別れは未だに忘れられない。多分、8月１５日敗戦の直前だったと思う。今日、北朝鮮や韓国から徴用工や従軍慰安婦として連れて来て、個人の人権を無視した日本の責任が国際問題となっている。日本人のしてきたことは償うことができない。せめて深く詫び、金銭的保障をすべきだと思う。

（山本作兵衛の画文集より）

太平洋戦争末期に日本軍がやったことは、狂気としか言いようがない。

北朝鮮政府が行った核実験、日本の上空を通過させた弾道ミサイル実験は、それに比べて軽い。「日本のやった長年の残虐行為は絶対に許せない。日本国民を全て海の底に沈めるまで許さない！」との金正恩の本音に私は頷くしかない。　（つづく）（国枝　健）

<参考資料>・炭鉱に生きる画文集（山本作兵衛　講談社）
・精算されない昭和（林えいだい　岩波書店）
・三たびの海峡（帚木蓬生　新潮社）・教科書に書かれなかった戦争（アジアの女性たちの会　梨の木舎）
・筑豊の子供たち（写真集）（土門拳　築地書館）
・地図にないアリラン峠（林えいだい　明石書店）

武田薬品の近況　・・・そして誰もいなくなった！！・・武田薬品湘南研究所

２０１１年２月盛大に竣工式を行った湘南研究所、世界最大級のバイオ研究所を旗印に。長谷川氏を最高責任者として多彩な研究陣をそろえ希望にかがやくものでした。

その後、武田薬品は巨大なM&Aをすすめ経営陣もグローバル化という名目で外国人が大多数を占める企業へと変貌しました。その過程で多くの中堅・若手の研究陣が会社を去った現実があります。即ち、現在の研究所の実態は大きく異なりました。研究・開発のトップは「湘南研究所の実態は“世界一生産性の悪い研究所”」と批判して研究所の大幅な変革を求めています。設立時の経営陣がほとんどいなくなった現経営陣は、研究所内に複数の新会社を設立し高生産性、高稼働率の模索を始めています。

この過程で多くが異動、一部メディアは研究陣が300～400人に低減するとも断言しています。

当会の会員が今年の武田株主総会でも「新会社設立に伴う湘南研究所人員の減少や安全管理体制・環境保全協定について」と質問をおこなったが回答はグローバル化をいうばかりというひどいものでした。

一方、その後の３者連絡会議（武田薬品・市・周辺町内会長）後の当会との面談においては、当初2000人予定だった研究員について、「武田は大幅な人員の削減は予定していない。現在は約１０００人体制」と説明しました。この従業員数の大幅削減は、地元藤沢・鎌倉の両自治体が「村岡新駅」の設置計画をどう進めるかに大きな影響を与える要素の一つで、両市議会でも議論が沸騰しています。研究所竣工時に武田薬品と県の間で結ばれた「新駅に係る確認書」の存在もあり、武田薬品の正確なコメントが望まれます。

また、複数の会社が入り乱れて活動開始した今、本来の研究所の稼動が適切な管理体制のもと安心・安全に遂行されるか危惧しているとの質問に対しては、「全て武田薬品が責任を負う」と説明しました。武田マネジメントがこのコメントをしっかり守ることを望みます。また、両自治体は複雑な組織体制になった研究所全体の監視を強化して欲しい。これ以上の迷走・漂流はごめんです。

（武田問題対策連絡会共同代表
福岡秀治）

ジェット気流発見にまつわる話
（シリーズ１４）風船爆弾計画の実態

冬期の強い偏西風が現れる期間に、集中的かつ効果的な攻撃を決行する必要があった。1944 年から翌年にかけた冬期に、1 万発の風船爆弾を放球することが決まった。気球の素材は和紙で、1 個の風船が全部で 600 個の紙片で構成されていた。和紙を貼り合わせる糊の素材にコンニャクイモを使ったが、食糧難の時期にこれは苦しい判断だったに違いない。

風船の漏れを検査するために、室内で直径約 10 ㍍に膨らませる必要があり、大きな劇場などの建物が使用された。さらに生産個数が増えるに従って、建設費用を節約するために日劇ミュージックホールや国技館が提供された。検査に合格した気球は表面に保護用ラッカーを塗布した。これらの作業には女子学生が動員された。大量生産のために数千人が作業に関わったが、作業者に対して何を製作しているかなどの情報が漏れぬよう厳しく統制された。

風船の製作が進む間、陸軍は計画実行部隊として気球連隊を編成した。彼らの仕事は、放球と放球後の追跡に相応しい基地の選定、風船に充填する水素ガス製造装置の開発、基地まで資材を運搬する経路の確保などであった。風船が北米大陸以外に飛んでいくことは避けなければならない。そこで、放球基地として茨城県勿来と大津、千葉県上総一ノ宮が選ばれ、追跡基地として青森県淋代、宮城県仙台、千葉県大原が選ばれた。放球基地のうち、水素ガス発生装置を設置したのは上総一ノ宮だけだった。他は関東の化学工業会社から鉄道で運んだ。　（つづく）

林　陽生（NPO シティ・ウオッチ・スクエア理事長）

放射能測定値（市民計測）
（HORIBA　Radi）単位（μSv/h）

9/29	辻堂駅北口	1F エレベーター前	0.031
9/29	〃	2F エレベーター前	0.037
9/29	〃	2F コンコース(風あり)	0.035～0.056

ECONET　INFORMATION

▲大地震、怖い？正しく学んで備えるのが一番

講師　浅見茂雄さん（三浦半島活断層調査会顧問）
10 月 8 日（日）14:00-市民会館第 2 展示ホール
参加費５００円 問合せ 0466-82-2036
主催　湘南のなぎさを守る藤沢市民の会
協賛　藤沢エコネット　湘南学習会議

▲福島の子どもたちとともに・湘南の会
講演会と総会
１１月４日（土） 13:30～
日本大学　１号館　３階１３３教室
講演「福島原発事故・放射能公害地域、飯館村の今と将来を考える」講師　糸長浩司(日大教授)
どなたでも参加できます

▲丹沢大山自然再生活動報告会
基調講演・事例報告・パネルディスカッション他
１０月１５日（日） 12:00-17:00
日本大学２号館２１１号室　無料　３００人
申込:丹沢大山自然再生委員会☎046-248-0323

▲武田問題対策連絡会講演と総会
１１月５日（日）13:30- 村岡公民館
ジャーナリストによるお話
「武田薬品湘南研究所の近況」
連絡先 080-5099-4264 青柳

▲藤沢エコネットから
前月 280 号に誤りがありました。お詫びし訂正いたします。３ページ 16 行目　浜本議員→浜元議員
◆会員募集＝年会費・購読料→2000円
◆事務局会議 10 月１３日（金）14:00～
市民活動プラザむつあい

《編集後記》秋刀魚が食べたい！と思っても 1 尾 180 円とは手が出ない。漁業国日本がサンマも手に入らないほど不漁なのだ。なぜ？昨年 9 月に逝かれた川崎健先生の講座を聞きたい。地球温暖化による被害は庶民の暮らしに直結している。臨時国会で冒頭解散、総選挙が 10/22 に行われる。暮らし第 1 に掲げ、憲法 9 条を加筆し戦争できる国にする政権はいらない。希望などという字に騙されず野党が統一して「アベ改憲ノー」へ繋げたいものだ。3000 万署名も始まっている。（H）